

## ☆☆文庫あれこれ☆☆

◇10月はお天気が続く頃と思っておりましたが、からっとした日は1日あったかしら、というくらいよく雨が降っています(5日現在)。そう言えばこの夏も雨の日が多かった…。しかし、14日現在、伊豆高原はさわやかなよいお天気!地元の方に聞くと、大島がすう目の前にくっきりと見えたとか!(東京とは大違いでした)◇おはなし(素話/ストーリーテリング)について少しお話ししたいと思います。日本では、特に農村部で語りつがれてきた人々の生活から生まれ、根をはって来た昔話があります。柳田国男をはじめ、現在でも各地を訪ねて昔話を採集している人は少なくありません。そんな方言による素話の他に、子どもたちに読書の喜びを知ってもらおう、それには、出版された図書のなかから、紹介して語って読書へと導くストーリーテリングがあります。これは、アメリカの図書館サービスを学んできた図書館員が始めました。今では、日本各地にお話の勉強会があって、お話を語る人は図書館員より、ごく普通の人が多く、学校や、図書館をはじめ、公共施設に出かけています。◇2年に1度、全日本語りの祭り、というのがあって、今年は今津若松で先日開催されました。私も行って語ってきました。(実は、2年前は、伊豆・修善寺だったのですよ。伊豆にもよい語りをする人がたくさんいます)そこでは、さまざまな種類のおはなしが語られます。方言で地元の昔話を語る人、戦争体験を語る人、外国の民話を語る人、身振り手振りよろしく語る人、歌の入ったおはなし、聞き手も誘い込む参加型のはなし、日本の古典etc。◇でも、子どもたちには、語る人の肉声を通して、お話がすなおに伝わる方法で語ろう、というのが本道でしょう。おはなしを聞くことは、お楽しみ会でアトラクションやエンターテインメントを楽しむのではなく、

(5P)

おはなしを紡ぐことばとリズムを感じながら、子ども自らにおはなしの世界を思い描く行為なのですから。ということで、沙羅の樹文庫でも、開館日の日曜朝、子どものための小さなおはなし会をやっています。◇けれども、おとなの人にも、おはなしを聞くのはたのしい、と感じていただきたいと、15日夜に、開きます。今回不都合だった方、ぜひ、次回はご一緒に楽しんでいただきたいと思います。また、大人向けの本のなかに1冊、子どもの本(絵本)を借りて読んでみてください。面白いです。◇本の寄贈について、感謝とお願いがあります。お手持ちの本を文庫にくださるというお話を聞きます。とても嬉しいお申し出ですが、まず勝手を言わせていただくと、一応、ここにある本は選んでおります。それで、いただくとき、こちらで、それをさせていだいてよろしいかということです。その選択やあと始末についてお任せくださるのでしたら、喜んで寄贈をお受けします。

## ☆☆今後の開館スケジュール☆☆

- ◇文庫の時間は土曜日は午後2時～5時  
日曜日は午前10時～午後3時
- ◇毎月日曜には、子どものおはなし会があります。いまのところは、  
午前10:00～10:30です
- ◆11月は、18、19日(第3土日)です。
- ◆12月は、16、17日(第3土日)で、  
17日の日曜日には、クリスマスお楽しみお話を午後2時～3時まで開催する予定です。親子で、おじいちゃんおばあちゃんもどうぞ!

(6P)

# 沙羅の樹文庫だより

## No.2

10月になっても  
はっきりしない日が続いて  
仲秋の名月も楽しめませんでした。  
でも、今日は空一面のうろこ雲、  
秋らしいさわやかな一日になりました。  
この週末もよい文庫日和になりますように!

(1P)

## 10月はハロウィーンの本をどうぞ

クリスマスのように、日本でもここ数年、ハロウィーン商法？が盛んです。デパートや専門店ではハロウィーン用の室内装飾グッズが出回り、若い人たちは魔女やタランチュラやこもりに変装して楽しんでいるようです。ハロウィーンはケルトの人々の年の終わり(10/31)の死者の祭(死んだ人々を迎える日)がその起源のようです。私たちの国のお盆ですね。

そんなハロウィーンにまつわる絵本や物語が文庫にも何冊かあります。家族で楽しんでみてください。

絵本：『魔女たちのハロウィーン』(E. アダムズ作／佑学社)

：『しゃっくりがいこつ』(M. カイラー 作／S. D. シンドラー 絵／セーラー出版)

物語：『ハロウィーンの魔法』(ルーマ・ゴッデン作／偕成社)：自分で読むなら小学中学年～

：『ハロウィーンがやってきた』(ルイ・ブラッドベリ／晶文社)：小学高学年～大人まで。

## 紹介・子どもの本 大人の本

### ★会員から会員へ・おすすめの一冊★

(文庫の棚の本をご紹介していただいております)

『わたしのワンピース』(にしまきかやこ作／こぐま社刊)

この絵本と出会うたびに幼稚園を退職する最後のクラス3歳児を受け持った時のことを思い出します。3人姉妹の末っ子だった彼女は、上のお姉さんたちに張り合っておしゃれをすることが大好きでした。

幼稚園に登園するとまっ先に本棚のところに駆けよっては、『わたしのワンピース』を1ページ1ページ楽しそうに捲っては微笑んでいました。

(2P)

白い布でうさぎがワンピースを作る。お花畑を歩くと花模様に、雨が降れば水玉模様に、草の中を歩けば草の実のように・・・と、いろいろ変わり、美しい夢の世界へと遊ばせてくれます。

彼女の家に家庭訪問に行った時のことでした。私がいる間中、まるで絵本のなかのうさぎになったように次々と自分のお気に入りの洋服を着ては現れ、「先生、このワンピースわたしににあうかしら」と、と問いかけ、楽しませてくれました。

リズムカルなことばととてもシンプルな絵ですが、時代を経ても子どもたちに親しまれる人気の一冊かと思えます。(稲本温代)

.....

『二つの旅の終わりに』(エイダン・チェンバース著／原田勝訳 徳間書店刊)

1995年、17歳のイギリス人青年ジェイコブは、おばあさんの代理でオランダ人女性ヘルトラウに招かれて、アムステルダムを訪れます。

彼はそこで、第二次世界大戦中にオランダ戦線でドイツ軍と戦って亡くなった、同じ名前の祖父ジェイコいきなり引ったくりにあい(何故そうなったか?)、それをフォローする親切な女性(その存在感はきわめて衝撃的)や、ゲイの少年、大学生のダーンとその母、レンブラントの絵、式典で祖父の墓に花を供えてくれた姉弟、運河..... 何ひとつ無駄なく伏線がはられていきます。

この本は「ジェイコブのアムステルダムの日々」と「50年前を振り返るヘルトラウの手記」を交互に示すことで緊張感が高まり、互いに響きあって登場人物の心のひだを見事に描きあげます。そして、祖父ジェイコブと、安楽死を迎えようとしているヘルトラウの秘密が明かされていきます.....。特筆したいのは、時を越えた「二つの旅の終わりに」が、人びとの様々な

(3P)

葛藤とそのエピソードが、だんだんと集約されていった最終章、ジェイコブはアンネ・フランクの家で、失くした大切なもの、何かを手に入れるとその代償を払わされることを悟り.....、そして「自分の目から隠してきた自己」を発見していくのです。

物語は広く深く展開され、520ページにおよぶ大作ですが、大変読みごたえがあり、こういう文学に巡り会う幸せを多くの方に世代を越えて味わっていただきたいと思いました。

ちなみに、優れた児童文学に与えられる権威ある英国カーネギー賞、国際アンデルセン賞、米国プリンツ(YA部門)賞など受賞しています。

(田畑木利子)

※チェンバースの本はほかに『俺の墓で踊れ!』が入っています。これも衝撃的な本ですが、大人にもぜひ読んでいたがきたい本の一冊です。

## 🌟🌟新刊入りしましたコーナー🌟🌟大人の本

『絵本からうまれたおいしいレシピ1～3』

ぐりとぐらのカステラ、ちびくろ・さんぼのパンケーキ、おおきいおいものいもスフレ、赤毛のアン柠檬パイ etc.

親子で作って楽しんで、いかがでしょう?

大人の絵本? 『魔法のホウキ』『アンジェロ』

ちょっと愉快地にさえなる寓話(オールズバーグ作/村上春樹訳)と、鳩と独り者のじいさんとの奇跡(デビッドマコーレイ作/千葉茂樹訳)。

ユーモアとペーソスと人間愛を感じるひととき!